The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The effects of mother-infant bonding on children’s strengths and difficulties
Author(s)	河崎, 智子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101900
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（河崎　智子）	
論文題名	The effects of mother-infant bonding on children’s strengths and difficulties （母親から子どもに対する情緒的絆が子どもの強さと困難さに与える影響）

【背景】

幼児期の親子関係や母親の精神的健康が子どもの社会的、情緒的発達に影響を与えることは、多くの研究で示されている。両親や他の養育者との愛着が良好である子どもは、問題行動が少なく、コミュニケーション能力が高く、友人関係も良好である。乳児期から続く母親の産後うつ病は、6歳時点の子どもの内在化問題（情緒問題）と関係があることが先行研究で示されている。子どもの情緒問題や行動を定量化する尺度に子どもの強さと困難さアンケート（Strength and Difficulties Questionnaire: SDQ）がある。SDQは５つの下位尺度（情緒の問題、行為の問題、多動/不注意、仲間関係の問題、向社会性）から成り、将来的に神経発達症の診断や治療をうけるリスクが高い子どもを特定することができ、日本でも広く使われている。自閉スペクトラム症や注意欠如多動性をはじめとした神経発達症の早期発見と支援の開始は、その後の子どもの発達を促進する。したがってこれらの症状をできるだけ早期に予測可能な因子を明らかにすることは、医学的および臨床的に重要な意義を有する。ドイツにおける研究では、SDQのうち向社会性の項目を除いた4つの下位尺度を用いて、14か月時点での愛着不全が5歳時点でのSDQスコアの上昇、すなわち子どもの問題行動の増加を予測すると報告されている。

【目的】

本研究の目的は、生後10ヵ月時の母親から子どもに対する情緒的絆（mother-to-infant bonding: MIB）と精神的健康が日本の5歳児の発達に及ぼす影響を予測することである。

【方法】

千葉大学におけるこども調査（Chiba study of Mother and Child Health: C-MACH）の275組の母子のデータを用いて、５歳時点のSDQ25項目を潜在クラス分析（Latent Class Analysis: LCA）によって子どもの特性を分類した。LCAは変数から潜在的な反応パターンを同定し、それらのパターンに基づいて個人を特定のクラスに割り当てるPerson centered approach である。次に潜在クラスと子どもの性別、兄弟姉妹の有無、世帯年収、母親の年齢、母親の学歴、母親の精神疾患の既往歴、赤ちゃんへの気持ち質問票（Mother-to-Infant Bonding Scale: MIBS）得点、エジンバラ産後うつ病質問紙（Edinburgh Postnatal Depression Scale: EPDS）得点との関連を評価するために、R3STEPを使用した多項ロジスティック回帰分析を行った。すべての分析では、P値が0.05未満であることを有意と判断した。欠損値の取り扱いには完全最尤法（FIML）を使い、データが完全に無作為に欠損している（MCAR）と仮定して分析を行った。

【結果】

LCAにより「asocial(非社会的)」（41.3%）、「well-adjusted(順応的)」（20.3%）、「highly difficult(非常に困難)」（38.4%）の3つのクラスが特定された。「非社会的」クラスではSDQ下位尺度における子どもの困難さと向社会的な行動が少なかった。一方、「非常に困難」クラスでは行動の問題や多動性が高く、向社会的な行動が少ないという特徴があった。多項ロジスティック回帰分析により、「非社会的」クラスは「順応的クラス」と比べて男児が多く（Odds Ratio (OR)=0.30, 95% confidence interval (CI) [0.11; 0.83]）、10か月時点のMIBS得点が高い(OR=1.39, 95%CI [1.00; 1.94])。「非常に困難」クラスは「順応的」クラスと比べて男児が多く（OR=0.16, 95% CI [0.06; 0.43])10か月時点のMIBS得点が高かった(OR=1.65, 95%CI [1.21; 2.26])。

【考察】

本研究では、SDQ全25項目を用いてLCAによる解析を行い、5歳児における3つのクラス「非社的」、「順応的」、「非常に困難」を特定した点で、日本初の縦断的研究である。男児や10か月時点で母親との情緒的絆が不十分だった子どもは「非社会的」や「非常に困難」クラスに分類されやすかった。本研究は、親や専門家が子どもの情緒・行動の問題や社会性の課題に対して予防的に介入し、支援を検討する上での重要な示唆を与えるものである。研究の限界として、自己申告データに基づくこと、地域的制約やサンプルサイズによる回答者の偏りが挙げられ、今後の研究では社会的サービスや家族機能の影響を含めた検討が求められる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　河崎　智子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	片山　泰一
副 査	特任講師	西村　倫子
副 査	教授	平野　好幸

論文審査の結果の要旨

幼児期の親子関係や母親の精神的健康が子どもの発達に影響を与えることは、多くの研究で示されている。本論文は、生後10ヵ月時の母親から子どもに対する情緒的絆（mother-to-infant bonding: MIB）と精神的健康が、日本の５歳児の発達に及ぼす影響を検討したものであり、こども調査（Chiba study of Mother and Child Health: C-MACH）データを用い、275組の母子を対象に赤ちゃんへの気持ち質問票（Mother-to-Infant Bonding Scale: MIBS）および子どもの強さと困難さアンケート（Strength and Difficulties Questionnaire: SDQ）では25項目のデータを収集し、潜在クラス分析（Latent Class Analysis: LCA）によって子どもの特性を分類した。その結果、「asocial(非社会的)」（41.3%）、「well-adjusted(順応的)」（20.3%）、「highly difficult(非常に困難)」（38.4%）の3つのクラスに分類できることを示した。更に、この分類において「asocial」クラスではSDQ下位尺度における子どもの困難さが高く、向社会的な行動が少ないこと、一方、「highly difficult」クラスでは行動の問題や多動性が高く、向社会的な行動が少ないという特徴を明らかにした。また、男児であることと10ヵ月時のボンディングが不十分であることが、5歳児の社会的行動の低さに影響を与える可能性も示された。本研究結果は、ボンディング不全に対する親支援や早期介入の重要性を示唆する大変優れた研究であり、学位（小児発達学）授与に値すると考えられる。